

E II 論文

「の」および「相対時表現」について

－ 日本語教育の現場で －

今泉 喜一

要 旨

日本語教育にたずさわる前田公子さんのいくつかの疑問から2点を選んで、構造伝達文法の視点から論述した。「の」については、「の」自体が意味を持つのではなく、状況が意味を持つこと。これを教えること。「相対時」については、教授者として、「絶対時」との違いを図示により理解しておくこと。学習者にとって問題となるのは、現代日本語特有の「相対時」を入れることで、「絶対時表現」との異なりが生じることであること。また、教授者として心得ておくべきことも述べた。

キーワード：の、「の」の意味、相対時、絶対時、基準点

1 「の」

1.1 問題点

「の」は、自分で理解したり教えたりするのに苦労している語である。例を2つ挙げてみる。

(1) 「所有」の意味？

- ・まず、「私の本」で、「の」は「所有の意味で名詞を修飾する」として教える。
- ・後日「私のです」があり、修飾される名詞のない形もあると説明する。
- ・「日本の会社」「木の椅子」が出てくると、「所有」ではどうにもならなくなる。

(2) 他の助詞との関係

- ・「あなたのいた夏」と「あなたがいた夏」は何が違うか。

このわずかな例だけでも、「の」をどう理解し、どう教えればよいのか、問題のあることが分かる。

1.2 日本語構造伝達文法での「の」の説明

日本語構造伝達文法では「の」を次のように捉えている。

「の」は構造上にある2つの実体(名詞)、A、Bをつなぐ。「AのB」(S1.6参照)

- ・「構造上にある」ということは、論理関係があるということである。
- ・「の」はAとBをつなぐだけで、「の」そのものには意味はない。
- ・結果として、「Aの」がBを修飾することになる。

この理論での理解を念頭に置きながら以下の論を進める。

1.3 これまでの教育

まず、「私の本」を教える。この「の」は「所有」を表していて、「私の」が名詞を修飾する、と教える。そして、「私のペン」、「私の名前」などで練習する。

「私の本」…… [練習] 「私のペン」、「私の名前」

しかし、その後、「日本の車が欲しいです」が出てきて、この説明に支障をきたす。

「日本の車」 所有？ 日本が持っている車？

それで、この「の」は「所有」ではなく、「生産国（～で作った～）」であると説明する。すると、次のように理解される。

「の」には「所有」と、「生産国」という2つの意味がある。

このように教えていくと、「の」が出てくるたびに、「の」の意味がふえていく。

この「の」は「メーカー」 (A社のパソコン)

この「の」は「所属先」 (日本語学校の学生)

この「の」は「材質」 (もめんのハンカチ)

この「の」は「職位」 (社長の田中)

学習者のうんざりした表情を見るのは、毎回のこととなる。

学習者からの質問……「の」にはいったいいくつの意味があるのですか。

1.4 提案:「の」の導入のしかた

「の」は名詞と名詞の間に何らかの論理関係があることを示す。

それで、「の」の導入は次のようにするとよいのではないだろうか。(「の」の導入時には限らず、学習が進んで、「の」をある程度まとめるときでもよい。)

「私」「絵」……この2語を提示し、この2語で考えられる状況を自由に出してもらおう。たとえば、次のようなものがいろいろ出てくる。

① 「私が絵をかいた」

② 「私が絵をもっている」

③ 「私を絵にかいた」

そのあと、そのような状況が分かる絵や写真、文を提示して、それぞれの状況を理解してもらおう。状況は異なるのに、「私の絵」という1表現で表せてしまうことに気づいてもらう。

「私の絵」

ここにある「私」は、それぞれの状況で、あり方が異なっている。

①の状況では、「私」は「作者」

②の状況では、「私」は「所有者」

③の状況では、「私」は「モデル」

これで、「Aの」がさまざまな状況を表すことが理解されるので、次のように整理してもらおう。

- ・「の」は名詞と名詞をつなぐ。
- ・その2つの名詞には何らかの(論理)関係がある。

- ・その(論理)関係は、状況や、前後の文脈で知ることができる。
- ・つまり、「の」の表現する「意味」は、状況や文脈でさまざまに異なる。

このようにして導入してからは、学習者は自分から、「この『の』は～ということですか」と、状況から意味を捉えるようになる。「の」の一つひとつの意味を記憶する必要はなくなる。

1.5 「の」表現には格助詞を補うとよい

逆に、「の」の使用されている表現があったら、その論理関係を正しく推測するために、格助詞を補ってみるとよい。

たとえば、「彼女の手紙」という表現があれば、普通はまず「彼女から来た手紙」として理解されるが、実際はこの表現はいろいろな意味・論理関係で使用されている可能性がある。

そのいろいろな可能性があることを理解するために、「AのB」とある「A」に格助詞を補ってみるとよい（A+格助詞のB）。Aの格が分かれば、動詞が推測でき、Bとの間にある論理関係が推測できるようになる。

「彼女の手紙」

「彼女が <u>の</u> 手紙」……………	「彼女が <u>が</u> 書いた手紙	（「彼女」は筆者）
	「彼女が <u>も</u> っている手紙」	（「彼女」は所有者）
「彼女に <u>の</u> 手紙」……………	「彼女に <u>に</u> あてた手紙」	（「彼女」はめあて）
	「彼女に <u>に</u> 届いた手紙」	（「彼女」は届け先）
「彼女から <u>の</u> 手紙」……………	「彼女から <u>から</u> 来た手紙」	（「彼女」は発信者）
	「彼女から <u>から</u> もらった手紙」	（「彼女」は授与者）

学習者が「の」の背後に論理関係があることを学んでいると、「の」の前の名詞に格助詞を補うことで、その表す論理関係が何であるかを推測しやすくなることが理解できる。格助詞を付けてみるとよい、ということは容易に理解されるはずである。

1.6 「の」のその他の使用法

1.1 に挙げた例にある「私のです」や「あなたのいた夏」などを理解するためには、次ページの表1が助けになる。この表は、表W4-2の引用である。この表そのものを学習者に示す必要はないが、教授者は理解しておくとうい。

「私のです」は表の、「の[2]」か「の[3]」に該当する。

「あなたのいた夏」と「あなたがいた夏」は「の[1]」に該当する。

「あなたのいた夏」と「あなたがいた夏」の構造は、次ページ図1、図2のように同じなので、事象は同一であると考えられる。前者では、「あなた」と「夏」を「の」で結んで表層化しており、後者では、「あなたがいた」という文で「夏」を修飾している。ここから言えることは、「あなたのいた夏」は「あなた」に意識の焦点があり、「あなたがいた夏」は「あなたがいた」という事象に意識の焦点がある、ということである。

なお、「電車の走る音」と「走る電車の音」は同じ音か、という疑問もあるが、この違いについては、A16.6において述べている。

2 相対時(相対テンス)

2.1 日本語は相対時表現が優勢である

日本語では「相対時表現」に重点がある。いま、同じ状況を表す表現として、2つの文を取り上げてみる。

- (1) 山に登ったまえに、歌を歌った。(絶対時表現, 図3)
- (2) 山に登るまえに、歌を歌った。(相対時表現, 図4)

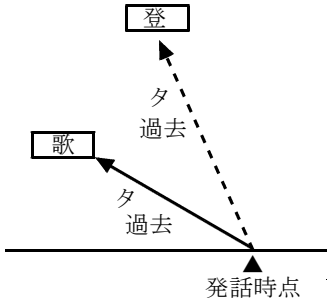


図3 登ったまえに (絶対時表現)

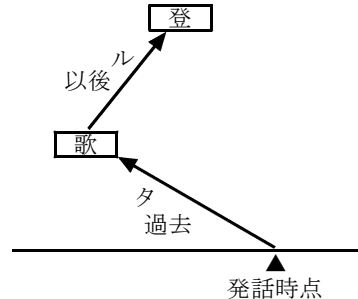


図4 登るまえに (相対時表現)

この2例のうち、絶対時表現である(1)はたまに聞くことはある。しかし、ふつうの言い方は相対時表現の(2)である。このように日本語では相対時表現のほうが優勢である。この相対時表現は現代日本語特有の表現である。

日本語教育の初級においては、この「相対時表現」を重点的に教える。学習者にとっては、おそらく母語にない表現を学ぶことになるので、困難を伴う。

本稿ではまず、「絶対時表現」と「相対時表現」の違いについて検討する。なお、ここでは「相表現」(アスペクト)の視点は、「現在」以外には入れないことにする。(「現在」の表現には、「ーている」の形で「相表現」が入っている。)

「日本語構造伝達文法」の絶対時と相対時の図に依拠して論を進める。

2.2 絶対時表現

絶対時表現の基準点は発話時点である。「過去, 現在, 未来」がある。

- (3) 人が歌った。(過去)
- (4) 人が歌っている。(現在) 「ている」という相(進行中)が入っている。
- (5) 人がいる。(現在) 存在を表す動詞はル形が現在を表す。
- (6) 人が歌う。(未来) 存在を表す動詞を含め、ル形が未来を表す。

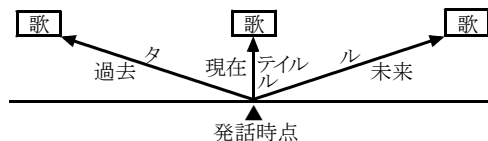


図5 絶対時表現の図 (図T3-5 を引用)

「過去，現在，未来」（「過去，非過去」）は，ほとんどの言語に普遍的に捉えられている。

2.3 相対時表現

相対時表現があるのは現代日本語の特徴である。

名詞を修飾する動詞がこの相対時表現の形になる。基準点は，下図のように，主文事象（この図では「歌う」）の生起時点である。例文として，下の（7）の文を示すが，これは下図の◇である。

(7) 山に登る まえに，歌を歌った。（名詞「まえ」を修飾している。）

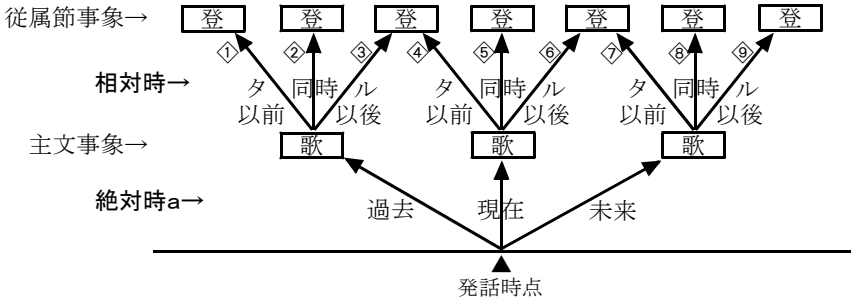


図6 相対時表現の図 (図T3-7 を引用)

相対時表現には「過去・現在・未来」はなく，そのかわりに，それに相当する「以前・同時・以後」がある。下の例文の が相対時表現を表し，下線部が絶対時表現を表す。この主文の絶対時表現は，上図では，「絶対時a」と表示してある。

(8) (上図の◇) 山に 登った(以前) 人が 歌う(未来)。

(9) (上図の◇) 山に 登っている(同時) 人が 歌った(過去)。

(10) (上図の◇) 山に 登る(以後) 人が 歌った(過去)。

2.4 絶対時表現だけで表す

図6を，相対時を使わずに，絶対時だけで表現すると下図の破線矢印のようになる。この従属節事象に適用される絶対時を「絶対時b」として示してある。

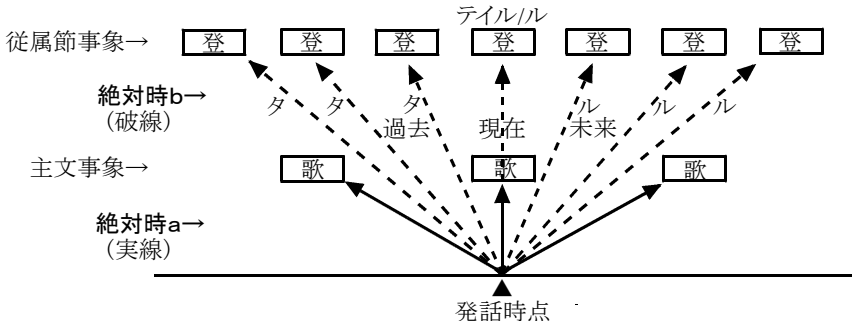


図7 従属節事象を絶対時で表現 (図T3-6 を引用)

先の[相対時表現](図6)で使った例文(8)(9)(10)の表すそれぞれの状況と同じ状況を，

相対時を使わずに絶対時だけで表現して、(8')(9')(10')とする。二重下線部が相対時表現から絶対時表現に変わった部分である。

(8') (図6の④) 山に 登る(未来) 人が 歌う(未来)。

(9') (図6の④) 山に 登っていた(過去) 人が 歌った(過去)。

(10') (図6の④) 山に 登った(過去) 人が 歌った(過去)。

2.5 絶対時表現と相対時表現が同じになる場合

日本語教育では、絶対時表現しか知らない学習者に相対時表現を教えることになるのだから、教授者は、まず、この絶対時表現と相対時表現の関係を理解しておく必要がある。そのためには、図6と図7を比べる必要がある。

図6は相対時表現であり、これが教えたい内容である。図7は相対時表現を使わない表現であり、学習者の母語とみなせる。

図6では、基本的な表現の数は9つとみなして、各表現に ④ ~ ⑩ の数字がついている。各数字につき、従属節の動詞の形が「た」になるのか、「ている」(相(アスペクト)の要素が入っている。)になるのか、「る」になるのかを検討してみる。

④ の場合は、相対時表現でも絶対時表現でも、従属節動詞は「た」になる。

[相] 山に 登った人が歌った。

[絶] 山に 登った人が歌った。

⑤ の場合は、相対時表現では「ている」になり、絶対時表現では「た」になる。

[相] 山に 登っている人が歌った。

[絶] 山に 登った人が歌った。

⑥ の場合は、相対時表現では「る」になり、絶対時表現では「た」になる。

[相] 山に 登る人が歌った。

[絶] 山に 登った人が歌った。

⑦ の場合は、相対時表現でも絶対時表現でも「た」になる。

[相] 山に 登った人が歌っている。

[絶] 山に 登った人が歌っている。

⑧ の場合は、相対時表現でも絶対時表現でも「ている」になる。

[相] 山に 登っている人が歌っている。

[絶] 山に 登っている人が歌っている。

⑨ の場合は、相対時表現でも絶対時表現でも「る」になる。

[相] 山に 登る人が歌っている。

[絶] 山に 登る人が歌っている。

⑩ の場合は、相対時表現では「た」になり、絶対時表現では「る」になる。

[相] 山に 登った人が歌う。

[絶] 山に 登る人が歌う。

⑪ の場合は、相対時表現では「ている」になり、絶対時表現では「る」になる。

[相] 山に 登っている人が歌う。

[絶] 山に登る人が歌う。

④ の場合は、相対時表現でも絶対時表現でも「る」になる。

[相] 山に登る人が歌う。

[絶] 山に登る人が歌う。

相対時表現を知らない学習者にとって問題がないのは、相対時表現が絶対時表現と同じになる場合、すなわち、④④⑥⑥④ の場合である。これは母語での表現で理解できる。

④ [相]でも[絶]でも同じ表現になる。 山に登った人が歌った。

④ [相]でも[絶]でも同じ表現になる。 山に登った人が歌っている。

⑥ [相]でも[絶]でも同じ表現になる。 山に登っている人が歌っている。

⑥ [相]でも[絶]でも同じ表現になる。 山に登る人が歌っている。

④ [相]でも[絶]でも同じ表現になる。 山に登る人が歌う。

2.6 絶対時表現と相対時表現が異なる場合

学習者が理解しにくいのは、相対時表現が絶対時表現と異なっている場合、すなわち、②③⑦⑧ の場合である。

② [相] 山に登っている人が歌った。(学習者は「登っていた」と思う。)

[絶] 山に登った人が歌った。山に登っていた人が歌った。

③ [相] 山に登る人が歌った。(学習者は「もう登った」と思う。)

[絶] 山に登った人が歌った。

⑦ [相] 山に登った人が歌う。(学習者は「まだ登っていない」と思う。)

[絶] 山に登る人が歌う。

⑧ [相] 山に登っている人が歌う。(学習者は「まだ登っていない」と思う。)

[絶] 山に登る人が歌う。山に登っている人が歌う。

図6からこの ②③⑦⑧ を残して、他を消すとういう図になる。

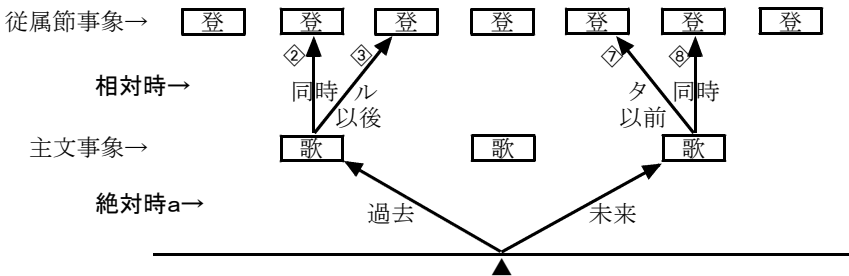


図8 問題のある部分

すなわち、次の場合が問題となっているのである。

- 過去の ◊[同時・過去]
- ◊[以後・過去]
- 未来の ◊[同時・未来]
- ◊[以前・未来]

これら ◊◊◊◊ の場合に、学習者の解釈と、教えたい相対時表現が異なっていることを図で明らかにしてみる。

◊[同時・過去]の場合

(11) 屋根の上にいる猫が鳴いた。(図9)

この例文で日本語として教えたいのは図9の関係であるが、学習者はこの文を絶対時表現で解釈するので、(12)のように考える。(絶対時表現ではこの考えは正しい。)

(12) (いま、あの) 屋根の上にいる猫が (そのとき) 鳴いた。(図10)

そこで、教授者は、日本語では図9の相対時表現で考える必要もあることを教える。

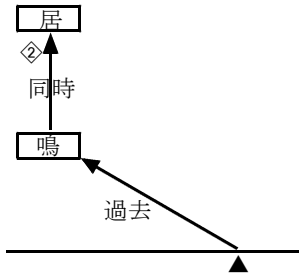


図9 教えたいこと(図8の該当部)

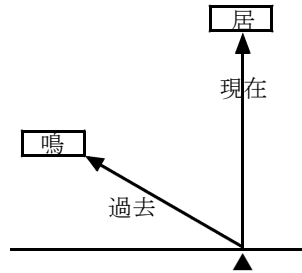


図10 学習者の解釈

◊[以後・過去]の場合

(13) 映画を見る人が切符を買った。(図11)

日本語として教えたいのは図11の関係である。しかし、学習者はこの文を絶対時表現で解釈するので、図12のように考える。(絶対時表現ではこの考えは正しい。)

(14) (あさって) 映画を見る人が (きのう) 切符を買った。(図12)

そこで、教授者は、日本語では図11の相対時表現で考える必要もあることを教える。

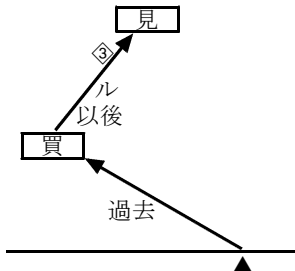


図11 教えたいこと(図8の該当部)

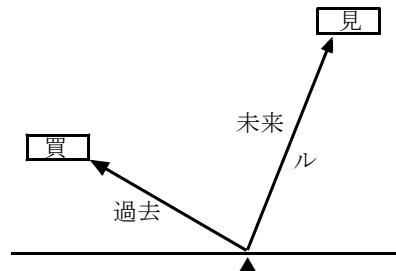


図12 学習者の解釈

◇[以前・未来]の場合

(15) 手を洗った子どもが席に着く。(図13)

日本語として教えたいたいの図13の関係である。しかし、学習者はこの文を絶対時表現で解釈するので、図14のように考える。(絶対時表現ではこの考えは正しい。)

(16) (さっき)手を洗った子どもが(10分後に)席に着く。(図14)

そこで、教授者は、日本語では図13の相対時表現で考える必要もあることを教える。

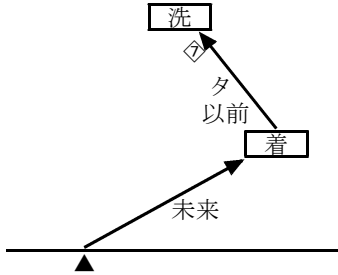


図13 教えたいたいこと(図8の該当部)

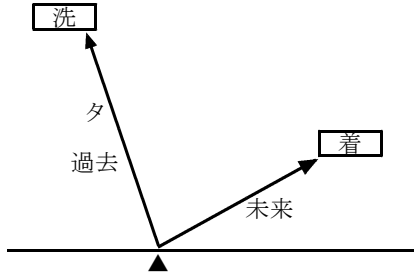


図14 学習者の解釈

◇[同時・未来]の場合

(17) 飛んでいる飛行機を見る。(図15)

日本語として教えたいたいの図15の関係である。しかし、学習者はこの文を絶対時表現で解釈するので、図16のように考える。(絶対時表現ではこの考えは正しい。)

(18) (いま)飛んでいる飛行機を(あした)見る。

そこで、教授者は、日本語では図15の相対時表現で考える必要もあることを教える。

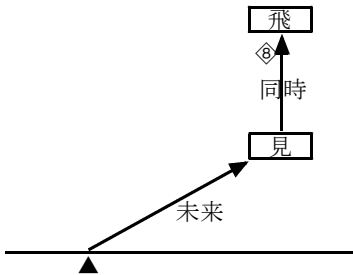


図15 教えたいたいこと(図8の該当部)

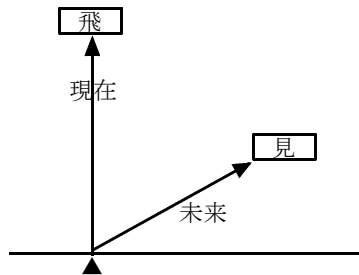


図16 学習者の解釈

以上のように、図6の ④④⑤⑥⑨ の場合は学習者は理解しやすく、問題はないが、④④⑦⑧ の場合に留意する必要がある。教授者はこのことを認識しておくといよい。

2.7 教授者の留意したいこと

そのほか、教授者の留意したいことのいくつかをここに挙げておく。

[1] 発話時点と関係がない場合があること

(19) 道を渡るまえに、左右をよく見る。

この例文が一般的なことを述べている場合は、「見る」が未来のこととなっていない。つまり、発話時点と時間的關係がない。

このような場合は、「渡る」という相対時表現が2つの事象の前後關係を表しているだけである。

相対時表現を教えるのには役に立つ。次の例でも同じである。

(20) 顔を洗ったあとで、出かける。

(21) 映画を見ているときに、ポップコーンを食べる。

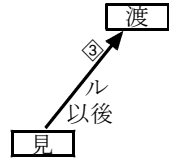


図17 発話時点と関係がない

[2] 相対時表現を教えるつもりで、絶対時表現の意識になってしまうこと

(22) (図6の④) 山に登るまえに、歌を歌う。

この例文の「歌う」が未来を表している場合、「山に登る」は当然未来の事象である。この「登る」は絶対時表現では「未来」であり、相対時表現では「以後」である。つまり、この例文の従属節「山に登る」は、絶対時表現でも相対時表現でも同じ表現になる。

絶対時表現と相対時表現が同じになる現象は、図6の ①④⑤⑥⑦ の場合に起こる。この ①④⑤⑥⑦ の例文を使うのは自然なことであるが、区別ができないだけに、教える側は「教えているのは相対時表現である」ということを強く意識していないといけない。うっかりすると、両者の区別があいまいになってしまうし、もしかすると、区別の意識も持たないようになっていくかもしれない。

[3] 同じ動詞でも、使い方によっては長さが異なること

たとえば、「帰る」という動詞の時間的長さは、使い方によって同じではない。

(23) 課長はいま帰った。この「帰る」が「退社」の意味なら瞬間的に終わる。

(24) 今日は電車で帰る。この「帰る」はある程度の時間的長さを持つ。

(25) 今日は6時に帰る。この「帰る」が「帰着」の意味なら瞬間的に終わる。

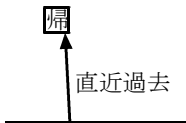


図18 いま帰った

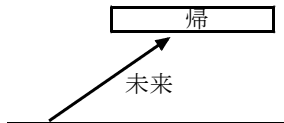


図19 電車で帰る

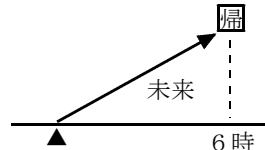


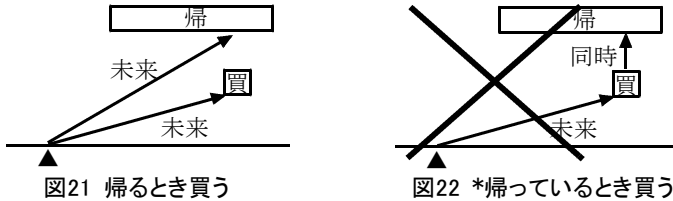
図20 6時に帰る

こう考えると、次の例文(26)の「帰る」は、ある時間的長さを持ち、主文の動詞「買う」とは、その長さの一部において同時になる。「(とき)」の表す時間的領域には特殊性があるので、Tの58ページも参照されたい。)

(26) うちへ帰るとき、ケーキを買う。(「帰る」はある長さをもつ。図21)

この「帰る」は絶対時表現と考えたほうがよい。というのも、相対時表現にするために、進行中・同時のつもりで「帰っている」と言っても、これは進行中を表さない場合が多く、「帰ったあと」を意味しやすいからである。

(27) *うちへ帰っているとき、ケーキを買う (図22)



例文(28)の「帰る」は、「帰着」を表すので、瞬間的に生起する。

(28) うちへ帰ったとき、ケーキを食べる。(「帰る」は瞬間的。図23)

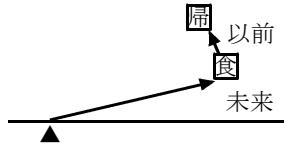


図23 帰ったとき食べる

この文で、「食べる」事象を未来に生起することと考える場合は、この「帰った」は相対時表現である。図6の◇である。「以前」を表すが、この場合は「直近以前」といったほうがより適切である。(Tのp.58も参照)

このように、同じ動詞でも、使い方によっては生起事象の長さが異なる。時相表現をするときには注意が必要である。

「覚え書き」をお寄せくださった

前田公子(まえだ・きみこ)さんの自己紹介

東京女子大学卒業、杏林大学大学院修士課程修了。日本語学校と日本語教師養成コースで教えています。最近、留学生から日本企業で働く外国人社員への授業にシフトしています。

日本語学習者の意表をつく反応にワクワクする毎日です。